玉葉和謌集

特別
イ4
3163
3(13)

貴
14
3163
3
(13)

花園天皇正和元年三月

前大納言藤原為兼

帝室
乃之記

春歌上

春立つ日よめる　紀貫之

とりもあへず都の春はおくれにき霞ぞ今は立ちまさるらし

延喜御時百首歌たてまつりける時立春の心を　源俊頼朝臣

春霞たなびきぬれば久方の月の桂も花やにほはん

寛平御時后宮歌合しける時霞を　前中納言定家

春くれば山のかすみをみてやまた月もよりくるたなびきぬらん

初春の心を　従二位家隆

神代よりかすみそめてし山ぞとも春の始めを人はしるらん

春の歌の中に　後京極摂政前太政大臣

早春の霞の色をみわたせば吉野の里に花ぞ散りける

百首歌たてまつりける時　前関白太政大臣

山ぢやもとまつ春風をまつ人にいかでか霞の立ちへだつらん

新院御製

春立つと吉野の山の白雪をかすみへだてず見るよしもがな

もりさのそ一めつくる夏海月まさせ法う
をろ
院御製
ちゑまもやそ吹もまきうろ湖風拍氣くろのもろさあ
湖海風時百首哥たてまつりし序を
まろり吹ひさ吹ろ吹ろ藤原基俊
遠保二年二月内裏ろ法ろのをあさせう
まゆつまものろまよ野外庭をよみ侍ける
松乃雪さまあやろ前中納言定家
百首法ろ春中に後鳥羽院御製
春きせいむ勢きろ冬ゆく民のあもきまあみ法

早春庭とろ
永福ろ院
学士院ろ部のろこ庭ろまひく
遠長二年詩哥合よ法ろまとふ
を演世行うまふ後鳥羽院御製
那波うろ入法ろそうろまむて春風うる地
海あまま命ろ法ろ舟ろ春
かをみ法ろ舟ろのもろ院御製
まろのん
百ろあ数のろ中ろ法ろ三位あ子
百首哥たてまつりし序
秋をろて庭ろまろ

湖上の朝霧といふ事をよみ侍りける

[illegible]　　右兵衛督基氏

[illegible]

二品法親王覚助

[illegible]

[illegible]　　前大納言公為家

[illegible]

[illegible]　　野宮左大臣

[illegible]

寛治二年百首の中に湖霧をよみ侍りける

[illegible]　　前大納言公為家

[illegible]

[illegible]　　永福門院

[illegible]

[illegible]　　九条内大臣

[illegible]

[illegible]　　権中納言定教

[illegible]

天満宮奉納書表の会に當
家苞梅の文ども多く當る頃の事ども
守覚法親王歌よませ給ひし時
仰ごとの
四方の梅我も我もと當るにやこゝろ
百首の内の梅
春ごとに匂ひまさりて當れる
うちもひさしき梅の宿かな
山里ふかく住む人の當てふ

寒泊百有余年のちはけるに新嘗
新嘗の日流按察家
あるまゝにかゝるあはれのあるにや嘗るまゝにうん
嘗ふりやまきる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛

嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛
嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛

嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛
嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛

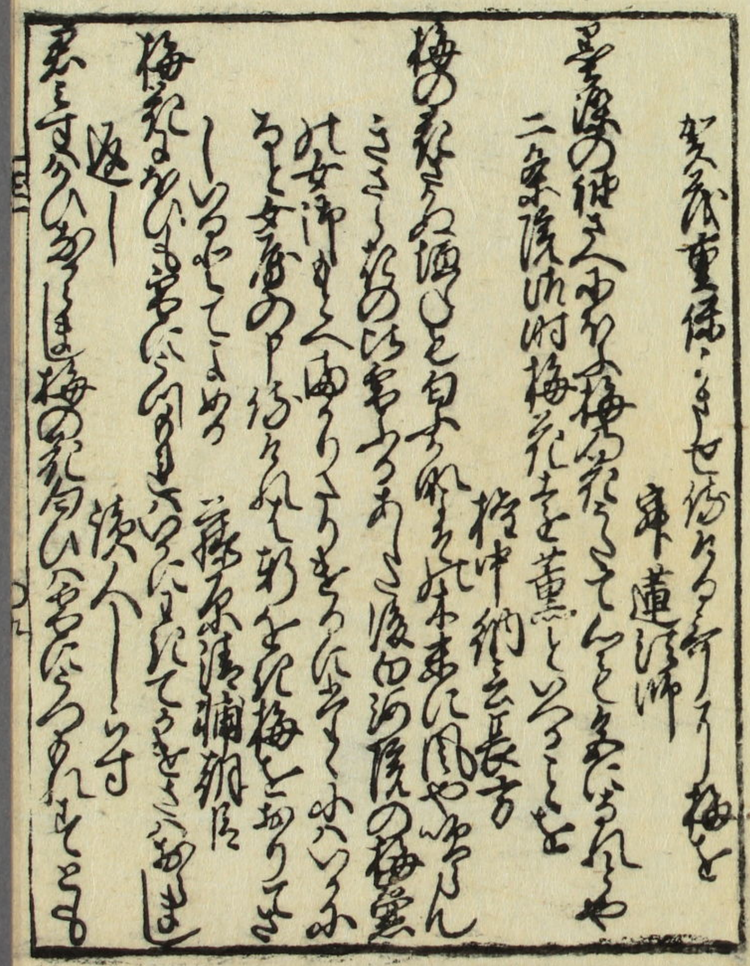
嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛
嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛

嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛
嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛

嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛
嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛

嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛
嘗ふりやまぬる時雨の降下野
後京極攝政
光うすき金屋の夕日もしぐれつゝ按察使公通
按察使公通卿
せはしくも紅葉ちりしく嵐かな
前参議経房
嘗祭過ぬる庭のあさぼらけ
平忠盛

[illegible]
[illegible]
[illegible]



賀茂重保
寒蓮沈淪
二条院讃岐
権中納言長方
後鳥羽院
藤原清輔朝臣
源人

家の梅にうぐひすのなきけるを

前内大臣

中務卿宮歌

権中納言定頼

江三位経子

江宮法橋

前大僧正実伊

院法橋慶

春歌下

五十首歌たてまつりし時

院御製

山桜

山桜ちるをまつまもをしからしいまいくかだにはなのさかりを

初花を

はつ花をまちつけてしも山桜ちるをあかずとおもふこころは

花歌の中に

山桜ちりぬるのちはをしからしいまいくかだにはなのさかりを

中務卿宗尊親王

花歌の中に

山ざくらちるをばえこそとどめねどうつろふかぜをうらめしとみる

祝部成仲

永福門院

今こんもや花さかりなるらんとおもひやりしは今日也けり

入道前太政大臣

山家花を
おもふ心をよめる
後恵法師

尚侍藤原頌子朝臣

みる人もなき山ざとの春の暮
さくらぞそれとしるべなりける

源仲緒

雪ふかき花をまつとや白妙に
みえて志賀寺の春の曙

前中納言定家

雲ゐまで花の梢をみわたせば
初瀬の山ぞ春のあけぼの

権僧正慶算

花のさかりよりまかりて
幸ありて花咲きぬとも
うもろ

亀山院御製

雲ゐのみて花咲きぬとも
張をよそに桜の
そへをさくらでと
雲ゐとこそ
ふのやまざとさくら
秋涙よ
ひのやまざとさくら

院御製

春八今日暮ぬ花に
春朝の
夕花と
山花と
花山高
汲三位親子
大江宗秀
右兵衛督親雅
亀山院御製
道前太政大臣

冷泉淡々
雪のさむき中にも春立ちぬる時
きろ中にも春立ちぬる時
山路梅花
春風やお花をのこりくまなく
西行法師
おそ山ざくらの花
たち居よ俤ひろ中よ
俤ひろ中よ
梅さくらまつ風やうらんやさらにちらんくも
春立ちぬる時
山路さく梅の香ふかき春風よ
西行法師
おそ山ざくらの花
たち居よ俤ひろ中よ
俤ひろ中よ
梅さくらまつ風やうらんやさらにちらんくも
春立ちぬる時
山路さく梅の香ふかき春風よ
西行法師
おそ山ざくらの花
たち居よ俤ひろ中よ
俤ひろ中よ
梅さくらまつ風やうらんやさらにちらんくも
春立ちぬる時
山路さく梅の香ふかき春風よ

きくのくれのまき
春の面梅ちりくまもる
白やれ中に
ちらくも名ハ
里ハ
是ハ
花ものこりくまもる
蘇東坡
入通第
入通第
指大納言房實
行恒
桐模

[illegible]
[illegible]
[illegible]

同家中務

同家中務

同家中務

注三位局子

民子

基俊女

雪中寄友人といふ事を

冷泉院春宮とおはしける時百首奉りけるに山吹を

花ハ今風のつまにあらそひてゆく
これさうの花のあるじもとめて
古寺殘花といふ事を
玄輝門院大納言
春ふかみ花のあるじやたれ人の
暮てもかへる
行くらむ
章義門院
春をおくるこゝろのほどもそれと
みえ百首歌たてまつりし時
故ちぎりおきてゆく春の名殘哉
入道前太政大臣

名殘春といふ事を
二条院讃岐
こえぬまの名殘ばかりしるべして
行くらむ
源三位頼政
別れとてこゝろひきとめ山ざくら
誰もさぞ思ひしことをよそへつゝ
きるらん
源三位頼政
あやめ草外山のあさもまだしきを
夏中三月尽
ひきうゑし
苗のをとろへ老ぬるも
院法家
春日社へなけるを百首の中に三月

夏歌

首夏の心を

入道前太政大臣

望大后之夢今宵成妾
はてそれもそのまゝ絶のこひなそそこひまろ
つゝし　伽はむ人の許の四月一日ひ
をふかゝ　周防内侍
四月一日ひとりねしけるに
ほとゝきすいまなきみてこゑものうきころと
を聞てよめる
院御製
ほとゝきすなくなくさそふあやめ草
袖ぬきかへむ時もきなくに
弘長元年百首歌よみ侍ける
永福門院

寺ゝうら海のあなたの面影ふかき春浪
廣義門院
卯花のうらめ名立る山里の
弘長元年百首歌よみ侍ける
前大納言為家
卯花の垣ねの雪の朝ぼらけ
光もそふる山里の月
卯花をよめる
二条為氏
卯花の垣ねの雪の朝ぼらけ
為家卿
秋卯花
月前郭公

入道前太政大臣

藤原為道朝臣

亀山院法養

亀山院法養

入道前太政大臣

今日も暮れぬ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

松陰や木のもとさむく流れくる山川の水

納涼

出初つる水のひくさをたのしみて涼しさうゑる夏の山

大江家秀

夏山の岩ひくさとて涼しさうゑる夏の山

平維貞

夏山のさしきをしきて松陰に涼しううつる夏の山

前大納言家雅

吹風の絶ぬ松陰に涼しううつる夏の山

前大納言有房

日暮ぬと松陰さむく打ふけて涼しううつる夏の山

成頼

旅宿涼

新玉の年をも経ぬと松陰に涼しううつる夏の山

法印尭守

風の音にさとも涼しううつる夏の山

法印園伊

三首の清涼

院内侍

竹ふかの一夜を夏の山里も秋の風吹ぬ

ものとてや涼しううつる夏の山

さ衣の袖も涼しううつる夏の山

正治二年百首奉

月の夜を松陰さむく打ふけて涼しううつる夏の山

玉葉和歌集巻第四

雑歌一上

七月一日の朝の空をながめてよめる

左近中将公衡朝臣

山里は秋の気色もうちしめりしのの笛吹く風の音かな

秋の歌とてよめる

前大納言公任

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

百首歌奉りし時

従二位家隆

ながめつる今日は昔になりぬとも軒端の荻に秋は来にけり

秋の歌とてよめる

前中納言定家

風吹けばまづ色変る浅茅生の小野の篠原秋の来ぬれば

秋の歌とてよめる

前大納言公任

秋の来ぬ宿はまがきに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

秋の歌とてよめる

前中納言定家

秋ごとに思ひ知るとは言ひながら猶あはれなる夕暮の空

秋の歌とてよめる

前大納言公任

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

秋の歌とてよめる

前中納言定家

二条院讃岐

秋の野の草葉をわけてをく露は
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

前大納言忠家

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

後法興院

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

前大納言公任

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

後法興院

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

前大納言忠家

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

後法興院

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

前大納言公任

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

後法興院

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

後法興院

秋の野の草葉をわけてをく露を
　花こそ玉の緒とはぬきけれ

永福門院
守覚法親王家
基俊
左金吾

雨中の
旅の空の地さびくもの
延保五年九月
雨の間ろを
名ぬれつゝや
雨そゝの後
旨なるも
日吉社へ
雲ゐまでも
かりそめ
永福門院
人麿
院内紀

湯原王

秋歌下

亀山殿にて松の下に秋の
月を見侍りて　　安嘉門院四条

秋の月かげまつ風に吹きかへて
露を波なる松の山面

小山田の稲葉そよぎて秋風の
吹くなり村雨の雲

秋の月山間さやけし　　前大納言為家

秋風の吹くにも散らぬ木の葉や
いかに染めおきて

もみぢ村雨　　後京極摂政前太政大臣

秋風の吹きこそまされ　　後法興院内大臣

小山田の稲葉の露や　　前大納言為家

秋の月山間さやけし　　後京極摂政前太政大臣

秋風の吹くにも散らぬ木の葉や
いかに染めおきて

もみぢ村雨　　後法興院内大臣

秋風の吹きこそまされ

題しらず　　天智天皇御製

秋の田のかりほの庵の苫をあらみ
わが衣手は露に

ぬれつつ

題しらず　　持統天皇御製

春過ぎて夏来にけらし白妙の
衣ほすてふ

天の香具山

題しらず　　柿本人麿

あしびきの山鳥の尾のしだり尾の
ながながし夜を

ひとりかも寝む

題しらず　　山辺赤人

田子の浦にうち出でて見れば白妙の
富士の高嶺に

雪は降りつつ

題しらず　　猿丸大夫

奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の
声聞く時ぞ

秋は悲しき

題しらず　　中納言家持

かささぎの渡せる橋に置く霜の
白きを見れば

夜ぞふけにける

題しらず　　阿倍仲麿

天の原ふりさけ見れば春日なる
三笠の山に

出でし月かも

題しらず　　喜撰法師

わが庵は都のたつみしかぞ住む
世をうぢ山と

人はいふなり

題しらず　　小野小町

花の色はうつりにけりないたづらに
わが身世に

ふるながめせしまに

題しらず　　文屋康秀

吹くからに秋の草木のしをるれば
むべ山風を

あらしといふらむ

題しらず　　大江千里

月見れば千々に物こそ悲しけれ
わが身ひとつの

秋にはあらねど

題しらず　　僧正遍昭

天つ風雲の通ひ路吹き閉ぢよ
乙女の姿

しばしとどめむ

題しらず　　陽成院御製

筑波嶺の峰より落つるみなの川
恋ぞつもりて

淵となりぬる

題しらず　　河原左大臣

陸奥のしのぶもぢずり誰ゆえに
乱れそめにし

われならなくに

題しらず　　光孝天皇御製

君がため春の野に出でて若菜つむ
わが衣手に

雪は降りつつ

題しらず　　中納言行平

立ち別れいなばの山の峰に生ふる
まつとし聞かば

今帰りこむ

題しらず　　在原業平朝臣

ちはやぶる神代も聞かず竜田川
からくれなゐに

水くくるとは

題しらず　　藤原敏行朝臣

住の江の岸による波よるさへや
夢の通ひ路

人目よくらむ

題しらず　　伊勢

難波潟みじかき芦のふしの間も
逢はでこの世を

過ぐしてよとや

題しらず　　元良親王

わびぬれば今はた同じ難波なる
みをつくしても

あはむとぞ思ふ

題しらず　　素性法師

今来むと言ひしばかりに長月の
有明の月を

待ち出でつるかな

題しらず　　文屋朝康

白露に風の吹きしく秋の野は
つらぬきとめぬ

玉ぞ散りける

題しらず　　右近

わすらるる身をば思はず誓ひてし
人の命の

惜しくもあるかな

題しらず　　参議等

浅茅生の小野の篠原しのぶとも
人知るらめや

言ふ人なしに

題しらず　　平兼盛

しのぶれど色に出でにけりわが恋は
ものや思ふと

人の問ふまで

題しらず　　壬生忠見

恋すてふわが名はまだき立ちにけり
人知れずこそ

思ひそめしか

題しらず　　清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつつ
末の松山

波こさじとは

題しらず　　権中納言敦忠

逢ひ見ての後の心にくらぶれば
昔は物を

思はざりけり

題しらず　　中納言朝忠

逢ふことの絶えてしなくばなかなかに
人をも身をも

恨みざらまし

題しらず　　謙徳公

あはれとも言ふべき人は思ほえで
身のいたづらに

なりぬべきかな

題しらず　　曾禰好忠

由良の門を渡る舟人かぢを絶え
行くへも知らぬ

恋の道かな

題しらず　　恵慶法師

八重むぐら茂れる宿の寂しきに
人こそ見えね

秋は来にけり

題しらず　　源重之

風をいたみ岩うつ波のおのれのみ
砕けて物を

思ふころかな

題しらず　　大中臣能宣朝臣

みかきもり衛士のたく火の夜は燃え
昼は消えつつ

物をこそ思へ

題しらず　　藤原義孝

君がため惜しからざりし命さへ
長くもがなと

思ひけるかな

題しらず　　藤原実方朝臣

かくとだにえやは伊吹のさしも草
さしも知らじな

燃ゆる思ひを

題しらず　　藤原道信朝臣

明けぬれば暮るるものとは知りながら
なほうらめしき

朝ぼらけかな

題しらず　　右大将道綱母

嘆きつつひとりぬる夜の明くる間は
いかに久しき

ものとかは知る

題しらず　　儀同三司母

忘れじの行く末まではかたければ
今日を限りの

命ともがな

題しらず　　大納言公任

滝の音は絶えて久しくなりぬれど
名こそ流れて

なほ聞こえけれ

題しらず　　和泉式部

あらざらむこの世のほかの思ひ出に
今ひとたびの

逢ふこともがな

題しらず　　紫式部

めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に
雲隠れにし

夜半の月かな

題しらず　　大弐三位

有馬山猪名の笹原風吹けば
いでそよ人を

忘れやはする

初瀬ひとくさの歌
建保二年九月十三夜月前擣衣
藤原為家朝臣
月前のお
み五首
ひとつ
建仁元年八月十五夜の合
冷泉
物の聖
将
なら

やくみるんやそのうなゐ子ともてゐてゐよとやよめ
多ふうりうまでやまとやまとことのかとはやそんのみやむ
寛治二年五月五日重陽宴
むかしなつかしき神やうらんもよりうんもよりうんもよりう

冬 二首

久安六年 崇徳院の百首の中に 冬

藤原清輔朝臣

山深み 道も埋もれて 雪ふかき 谷のかけはし 踏みわけてこそ

九月晦日 内裏の御会に 紅葉を

今上御製

今よりは 秋の木の葉を 見てもまた 幾しぐれとか 人のいふらん

同じ時 紅葉を

前大納言公任

年ふれば 身さへ木の葉と 降りしきて 行くへも知らぬ 嵐なりけり

同じ時 紅葉を

前大納言公任

嵐吹く 高き梢の 紅葉は 麓の里の 秋にぞありける

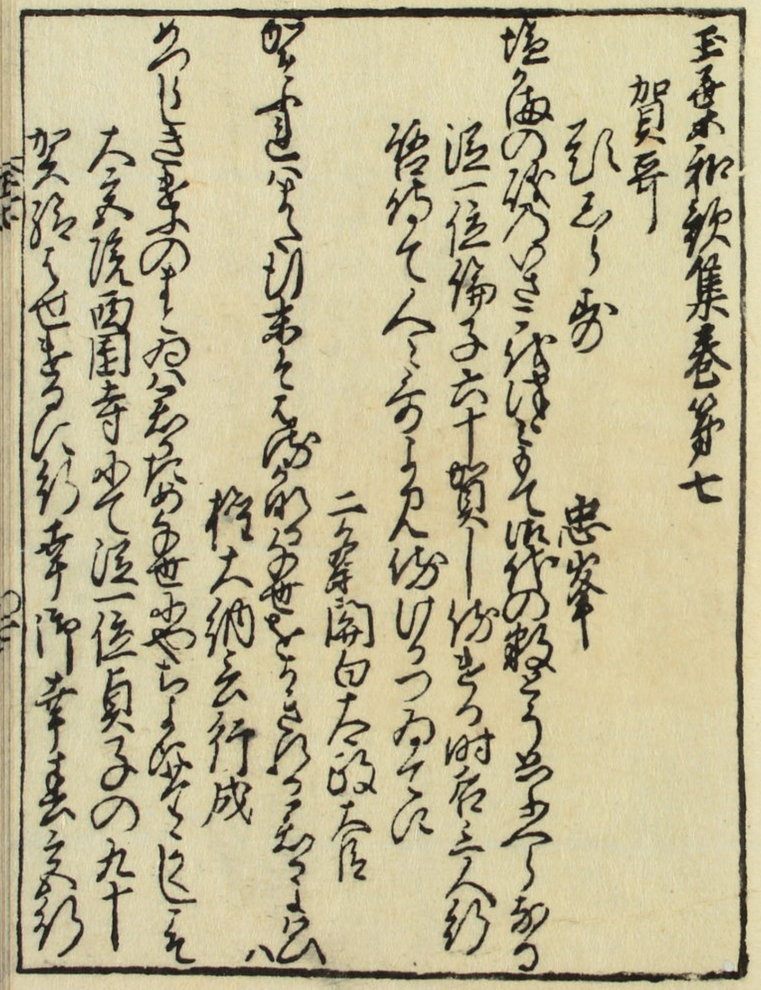
同じ時 紅葉を

前大納言公任

秋ごとに 染めてぞ人の 惜しむらん 時雨ぬ山の 紅葉なりとも

藤原為家
平宗秦

賀哥



啓するとあるそんなつもりでは
時
みそのみそもくそもいっしょ
荻生徂徠
狂歌新成仲九十賀
つつがなくめでたくもあるおん祝ひ
荻原重秀伝物語
延仁二年承松あるそれ松竹梅
そうるものと海せられけり
六条入道前太政大臣
天武天皇の御代に
初めて
冠位と
爵位とを
定められた
都を
奈良に
遷された

小一条左大臣済時
のまもなくうせ給ひぬ
親子の内親王
さるべき中納言
まうしの時
ひらに
祥雲寺殿
東三條院
順
祥雲寺殿御遺誡
東三條院御葬送
順海
服忌令
正月七日

後深草院御代弘安の
よの人歌つかうまつりけるに
――さくら
とてひつをさし折くもの
後深草院御製
折もなき雲もさくらの
花の色
後深草院御歌
雲のゐるひろ山のみねの
桜の民

あめの
中納言
たをやめ
をみなへし
みかきの
てるみ
延長
大納言

在原業平朝臣

清鏡ありて給ふ
すとて
ふみ
四年女院
泣き給ふ
千載集奏覧の時
久永二年三月
天喜五年大嘗會悠紀方

承保元年大嘗會
村松
八隅知之
康治元年大嘗會悠紀方

配

逢坂の関を
ゆきさ國よ
山

藤原敏行

秋初風
秋初風

平康頼

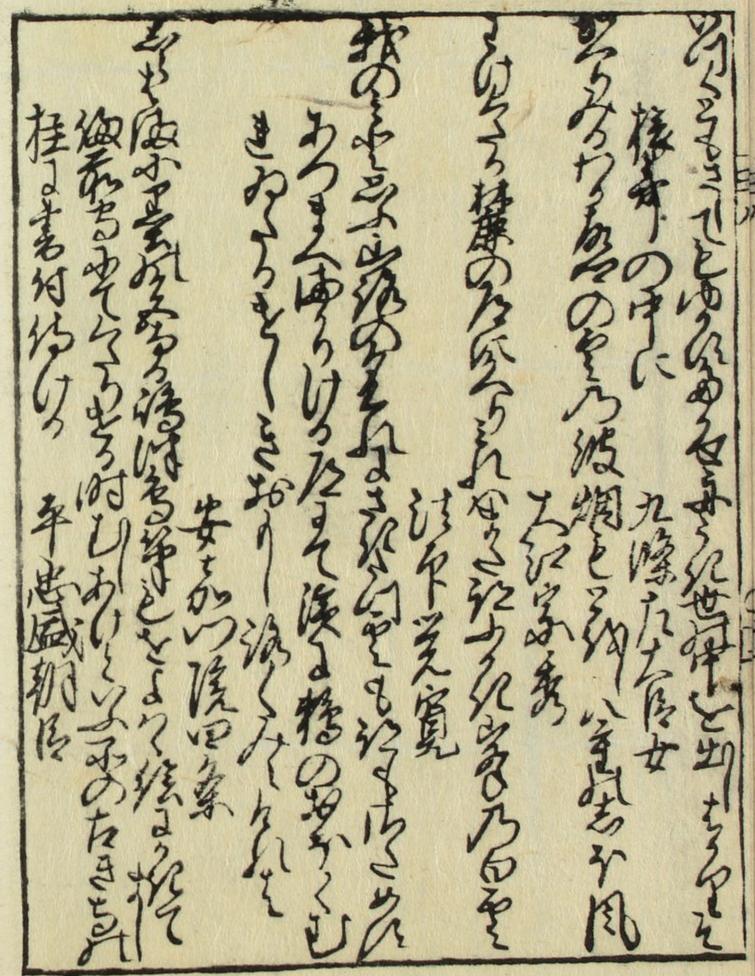
藤原為信

平宗時

中原師宗朝臣

従二位権大納言典侍
二条院讃岐

霸中尽くしの
後の
霸権後の
後の
尽
中院入道
丹波長典
大僧正
承推僧正



戀哥一

紀友則

ゆふまぐれ物おもふ袖に風たえて
物おもふ袖にあきはきにけり

大納言實家

ゆふまぐれ物おもふ袖に風たえて
物おもふ袖にあきはきにけり

入道前太政大臣家

今日もまた昨日にかはる心地して
けふにおもへる昨日の夕暮

前大納言為氏

今日もまた昨日にかはる心地して
けふにおもへる昨日の夕暮

後宮女御

あふことをいつとまつらん夕暮に
つれなくかへる山のはの月

院御製

あふことをいつとまつらん夕暮に
つれなくかへる山のはの月

院新宰相

あふことをいつとまつらん夕暮に
つれなくかへる山のはの月

海旅

立ちかへりまたもとまらぬ旅なれや
心治百首の内の雜哥

前大僧正慈鎮

旅衣袖ふきかへす浦風に
夢もとまらぬ波の上かな

中務卿宗尊親王

旅衣袖ふきかへす浦風に
夢もとまらぬ波の上かな

前中納言定家

旅衣袖ふきかへす浦風に
夢もとまらぬ波の上かな

贈正

芦の屋灘ひなもの
つみせんかくとハ今ハひとそ
ひよろ
おるこそ
月見せ我ハ
ふかちこ

小町

戀哥二

藤原實方朝臣

園融院御製

相模

相撲
未人
伊勢
小弁
冥加茂

関白前太政大臣

清原深養父

注三位宰相
永縁二年内侍
兵部卿師
院新宰相
兵部卿
承保二年

院御所

永陽門院中将

別當

題しらず

あま

あまの海もとをとをしほ

法印尊子

くれなゐの浪のよるよる

女房

波のうへにひろまもをかぜ

前大納言為家

いせの海や玉藻ぬるらん

為家朝臣

あまの海やみるめもおふる

前中納言為守

あまの海やみるめもおふる

小侍従

題しらず

二条院讃岐

我袖にあまりもつまぬみまくさや

大原山荘

かりほさすあまのとまやの

西行法師

月前恋

夜もすがら

皇太后宮大夫俊成女

十月の合せの月をといふ事を

後法興院

秋ふかき

前大納言公蔭

月前恋

夜もすがら

皇太后宮大夫俊成女

[illegible]

[illegible]

[illegible]

永福門院

順

永徳の院

院御製

前参議家親

第中納言定房

院新宰相

院法印慶

光後朝臣

安嘉門院四条

和泉式部

法印観子

雜歌一

花山院御製

うち出でつゝみたる名乃入りたるにのろきて名
のめされ時早春賞
（通）前大納言
迷懐百首のうち述懐の中よ賞
花さかぬ宿ぬ植なるものゝ
まことの中よ
さのみやは拾ふ人ぬもあらんとも思ひつゝ
さらぬまれなる
むかしの跡ぬもとめんとも思ひつゝ
平時部
梅ぬ
今ぬ
ぬ
ぬ

淡仲

春毎花よ心そあやとさくらの中よ
春はいまのみしの花ぬ
きよみしの花ぬ
ちる無くも千歳
ちりそて花をまつ
そる風をいる
吹風のそれよあらさらめ

後深草院御製

後宇多院御製

亀山院御製

後深草院少将

後伏見院御製

後二條院宮内卿

永福門院

哭花未知
秋源
今
ちる人
山桜
春

蓮生法師

故郷花

見ぬ世まで今もかをれる花ゆゑに

なほ故郷の春ぞ恋しき

藤原基俊

山ざくら折られぬ枝もなびくまで

紀淑氏名信

ふきまよふ風の心ぞ恨めしき

みるまでのみの中よ

法印雲海

みるまでのみの中よ

藤原定家朝臣

なほ恨めしや山ざくら風

源道方大納言

一重ちる木陰のつゆもあだならで

花山院内大臣

花ゆゑ春の日をぞ経ぬらん

平親宣

風ゆゑおほくの春の夢ぞ覚めぬる

前大納言雅言

花ゆゑ人の心ぞ移ろひぬる

法印栄昭

一重ちる木陰のつゆもあだならで

花山院内大臣

花ゆゑ春の日をぞ経ぬらん

平親宣

賀茂祭久
平惟範朝臣
藤原長清

つくりけり
出るらんうらみてみ月をまつそ有ける
返し　　嬉冷泉院式乃　令婦
露ならぬ涙山月
宵ならぬ心のやくまそ有ける　　四条大宮左京大夫野
乳母のひりまる入道前太政大臣
理ひまおく人の心　　前大僧正隆弁
月のみ
理ひまおく人の心　　お大納言為家
暗き夜の月
返し　　清浄寺
月ならぬ心の闇を照すとも

あくる日歌合の事ありけるに
法性寺入道前太政大臣
今の後拾遺の撰ありけるに
後深草院御時山階入道前太政大臣
云ふかひなきよしを
物をおもふ
雲ゐまの月ならぬ
返し
御ゆるす我世ふ秋
二条院讃岐
けふ秋初りそめて

近衛大将大臣大将
[illegible]
[illegible]
[illegible]

和泉式部

ふるとなみだもまづぞおちにける
　袖ならぬ枕のもるにやあらん

奥山の岩間の水とながれてもたぎつこころを
　せく人ぞなき

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より
　なほ宮木野の沖の白波

和泉式部

物おもへばさわの蛍も我が身より
　あくがれいづる魂かとぞみる

大納言公任

滝の音は絶えて久しくなりぬれど
　名こそ流れてなほ聞こえけれ

中務の家の前に

植ゑし松
　ここをかよひの道とたのめて
　来ぬ人を
　まつほの浦の夕なぎぞする

藤原秦朝

君が代は千尋の底の石までも
　苔のむすまでなほ残りけり

法印信雅

雜哥二

春日野に煙立つ見ゆ娘子らし春菜摘ますと籠もよ美籠もよ掘串もよ

春日野を

春日野に煙立つ見ゆ娘子らし春菜摘ますと籠もよ美籠もよ掘串もよ

雜哥二

春日野に煙立つ見ゆ娘子らし春菜摘ますと籠もよ美籠もよ掘串もよ

春日野を

春日野に煙立つ見ゆ娘子らし春菜摘ますと籠もよ美籠もよ掘串もよ

順徳院御製

旧都を淡海の橋柱ゆゝしくも
さもわたるかな
二條院讃岐
淡海の橋柱ゆゝしくも
けらひあつまりてこそ
かゝるわたりをもわたるなれ
かゝるわたりのわりなきまゝ

若狭守

橋のこゝしはゆゝしくも
二条院讃岐
橋のこゝしはゆゝしくも

泰衡の跡あれさうなり

淡人〻らす

世中をもとのあまにてとゝめおきて
今ぞ思ひのあまとなりぬる

人麿

淡海の海の沖もさうむさ荒れゆくか
風やさむき浦さひ鳴く千鳥
寛治二年百首

浦私

淡海の海のゆきかふ舟も
新古今

あまの日矛の奉献のことあとよろこびの浪
世間飄泊の海を渡るとみるを
楫をとゝめ却て海上の勝景を賞ぬる百首の
題詠の浪浮谷の塩竈のみつきもあれ村立
雲間院松窓
冷泉前大納言為広
海上眺望
浪のうへ久方の月影あれと袖こゆる
鴻松をよめる
前参議雅有

波うつみゆきの浦ひとの雲ゐなるかりは
秋うすし
侯人一ら
浪高しふかき夜半の月やとさゝやくへ
風とゝもに寒き須磨の浦波
うらのそなたの名にしおふ女島ほのかにみえて
夫木集よりとりて
久堅の浪路をこえて
海上眺望
みさををくみてうれしき海の幸
院新宰相

踏みわたりの浦の朝汐をあさる鶴

雪はふり浦風さえて夜もすがら
　　月にぞ千鳥声聞ゆなる

　　平時継

寛治二年百首の小鶴霜と
いふ事を

あしの葉に霜をかさねて宿からん
　　月に鳴くなる千鳥聞ゆる

　　源俊平

清みゆくさざら波より出でそめて
　　水巌
曙渡る沖つ白波

　　赤染衛門

寛治八年八月十五夜関白前太政大臣
家にて海辺月を

秋の夜の月の光し清ければ
　　沖こぐ舟の数も見えけり

　　前大納言忠家

寛治元年八月十五夜関白前太政大臣
家にて海上月を

沖つ風吹きにけらしな月清み
　　海面にたてる波の白きは

　　中原師善

万里小路前右大臣
家にて海上月の
心をよめる

塩風に満ち来る浦の夕なぎに
　　雲もとまらぬ秋の月かな

　　賀茂重久

永縁四条宮
扇合に

秋風の吹きにし日よりわたの原
　　八重立つ波の色ぞ変れる

　　源俊頼朝臣

入道二品親王家
五十首歌に

桂なるみるめの浦の朝なぎに
　　浪間よりこぐ舟の一艘

月のうち梢の山はうめて物深くやちくさ
もき野もやゆうくらし秋きぬ宮の月てぬく
ろ
題不知　　従二位家子
秋風のふきみだりしみ狩衣ゆくへ秋たつ
ころも
　　平時春
秋ふかき月は松のこえ〳〵ゆくへやま
かぜ
　　前太政大臣
いく夜ねぬ暁の袖ぞ故郷の衣うつ
声治而有余
　　坂上是則
あかでこそ人をもみしか暁の
　　永福門院

里〻風ちの秋を名ぬ山ゆきよりし暁の
　　前大納言家
山深き秋きぬ暁のそら
　　藤原基俊
暁のそら風さえわたる秋の夜
秋ふかし暁ふかき秋の月
　　永福門院内侍
うたゝねの夢ふかき暁
　　中院前世
暁の秋のひとよもあるものを
　　前大納言
秋ふかし
　　平時元

永福門院

遠礼流右京亮

永福門院

浄土宗

浄土宗

浄土宗

雑歌一三

阿一上人

道命法師

泊三位入道

雜哥四

伊勢

武藏野の草葉もやゝ色づきぬ世のうき人を秋ぞ知らする

世のうきめ見えつる山をいでぬれば猶行末ぞ道なかりける

年ふれどかゝる思ひもなかりしをいかなる秋にあはんとすらん

雅成親王

ひとりゆく道さへ露にしをれつゝ袖のみ濡るゝ秋の山かな

前大僧正慈圓

おもふ事なくてもすぎぬ世の中をいとふ山路の秋の夕暮

皇太后宮大夫俊成

世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる

藤原清輔朝臣

はつこひ　出羽辨

弘徽殿女御　天慶四年

大納言師伝男頼孝　後朱雀院

選子内親王

二条院讃岐　源頼政

清輔朝臣

永福門院

女御藤子　女王

殿富門院大輔

中納言

二条院の御時侍従にてまゐりてやて二人さふらひをりけるに中納言典侍

紀伊國より

伊勢大輔きよみ
をといひはるうて侍られて

[illegible]
朗詠のえいの
久羽しいよ
みるひよ
雑仕ふ
[illegible]
[illegible]

永福門院

[illegible]
[illegible]
[illegible]

大納言よし房卿の十首の人々よ
ませ給ひしに大納言三位の君を遣りて
仰せごとを尽してつかはし
ける

松の浦やくだくる波もかけかへて
　返し
松の浦ふく風もとどまる御教
新後撰撰集にのりて後に其時勅答
ありしとぞ
ひさ浦のあまをとめらもやかなくも
おもひ集にけむ
　平貞時朝臣
なくなくもかきつくしてし玉ぼこの
道の末をば猶ぞ尋ぬる
　中院権大

山里みて月のあるさま歌よめる
女師澂子女王

久堅の雲井を照らす月の精霊もいかでかくは
はうりけむ

もろこしやうの分て月歌を
百首ばかり中よりさゝ夕雨を歌をえらみ出
今ことに新たにくさ〴〵のさまをえらみ出
侍て出す紀世行のさまをまねびおかさんとにはあらず
山里は絵かきうつしたるやうにおもしろく
おぼゆるよしをまねびたるまでなり

題詠

雨後月

雲はらふ夕立すぎて山の端の月の光ぞ
いとゞすゞしき

月前蛍

ともしするほたるの光かげうつす
窓の月ぞ
いとゞすゞしき

月前虫

月ぞすむ
いとゞすゞしき

月前風

月ぞすむ
いとゞすゞしき

月前雨

月ぞすむ
いとゞすゞしき

月前雪

月ぞすむ
いとゞすゞしき

月前月

月ぞすむ
いとゞすゞしき

月前述懐

月ぞすむ
いとゞすゞしき

月前祝

月ぞすむ
いとゞすゞしき

月前恋

月ぞすむ
いとゞすゞしき

月前旅

和泉式部

大納言還任を仰られんとやうけ
ゐたる私述懐といふ事
[illegible]
[illegible]
[illegible]

述懐

平政時

前大僧正道昭

前参議従三位藤原朝臣房前

前参議従三位藤原朝臣宇合

前大宰帥従三位大伴宿禰旅人

前大納言正三位多治比真人池守

前大宰帥従二位大伴宿禰旅人

前大納言正三位兼中務卿藤原朝臣武智麻呂

前参議従三位藤原朝臣房前

前大宰帥従三位大伴宿禰旅人

前大納言正三位多治比真人池守

前大宰帥従二位大伴宿禰旅人

前大納言正三位兼中務卿藤原朝臣武智麻呂

前参議従三位藤原朝臣宇合

前大宰帥従三位大伴宿禰旅人

前大納言正三位多治比真人池守

前大宰帥従二位大伴宿禰旅人

人麿の墓に参詣して作れる
作者
古墳
おもひ
まくさ
古墳
初瀬
てらみ
かさり
妙智
等
法師
藤原

釋教哥

法印幻深

大江貞重

法三位廣範

僧侶會

前大僧正慈演

民アヒ敬頼

佛此夜滅度如薪盡火滅乃至
方便示若人散乱心乃至以一華供養於畫
像漸見無数佛　住不断絶
おのおの一恒河沙等の菩薩大神通力ありて
世中に充満して広長舌を梵天に至し
大音声を普く一切世界に遍ねからん
其中の衆生聞信随喜する者あらん
斯人一切に於て阿耨多羅三藐三菩提
平宣時敬白

小車にのりて
釋教のいろいろ
わかりもしらぬなりけり
信解品周流諸國五十餘年乃至
藤原親盛

衣の玉
薬草喩品の五十あまりひとつの道
佛にあふ
崇徳院御製

授記品乃ん
[illegible]
[illegible]
[illegible]

生く死に見耳　元信朝臣

玄の玄妙玄と世尊の玄玄玄
玄量玄義經四卷餘年未顯玄玄玄

四卷　おなじ心經の一紙よりの
維摩經のうち
小卅
夕雪ふかくふりしく雪のそのうへに
心經のうへにおなじ雪のつもりて
ゆくとしのうへにつもるも
法印　獻圓

金剛般若經如來所得無實無虛といふ
僧正　尊朝

無量壽經嚴淨國土端正觀見

第六納云云
不輕品
藥王品廣宣流布
法花經乃至一念隨喜
おなじ心經
毋の字
法華經
後五百歳遠霑妙道
法花經出世本懐

おほいなるかな
おほいなるかな
おほいなるかな

紀伊國うのやまでに和ち乳捨ひさりの海きれ
てみてさるに仏語ありて衆生悉皆慕ひ
ひとをもうんうんありといふ事ひせれて
渇仰ひとをなるあるものなくく礼拝する
地よひらひをなるあるものなくく礼拝する
ホトケ釋迦大師周位の時猶佛よあ
ひとて涙よりてゆきそなる仏
仏今よそ御ありて秋の福田なる事ひせ
られて涙ひけり　高弁上人
おうみのくにやまのでらにて仏法ひ
系様前開口家の女牛海乃松の根に移おおよ
死をまもるひのさーぬくらもりの死をもて

二條右京大夫
ほうらいの
そくひの死法ひまでて仏ひるかぬる
ホ年仏のんを
かて樹をみ今ぬくおんなもの
仏仏者しぬをまもる時ぬ
そくひの死仏ぬくおんなもの
歌友ひの死中に
ぬあまひのの死ぬくおんなもの
般若心仏ホ年

注中選秀

注維摩文殊菩薩ぬくおんなもの
注法華玄義ぬくおんなもの
注大納言の妻

神祇哥

九條右大臣女

[illegible]

後深草院御

寛治二年十月二日合

後久我前右大臣

第十一

第十一

右京権大夫

事ありて遠流
[illegible]
て後ゝのそけなく
[illegible]
よりつゝ
[illegible]
蛾とも
[illegible]
日吉社のよけ
[illegible]
[illegible]
おもひ
[illegible]
[illegible]
神祇のこのこと

平忠盛朝臣

第六

第六